

北海道東部，厚岸町史跡国泰寺跡において認められた歴史および先史津波の痕跡

添田雄二¹・七山 太²・熊崎農夫博³・堤 康夫³・車塚 洋³・桂川 実³・山田悟郎¹・赤松守雄¹

¹北海道開拓記念館，²（独）産業技術総合研究所，³厚岸町海事記念館

北海道東部太平洋沿岸域は，地震津波の多発地帯である．同地域には，縄文海進以降に生じた湿原や海跡湖が多数存在し，近年，過去数千年間に堆積した泥炭層および湖沼堆積物中の津波堆積物に関する研究が活発に行われてきている．このうち，浜中町霧多布湿原地域においては，過去3,000年間に生成された泥炭層中に10層のイベント堆積物の存在が，釧路市春採湖の湖底堆積物中においては，過去9,000年間に約20層のイベント堆積物がそれぞれ確認されている．厚岸町は，北海道東部太平洋沿岸の釧路市と根室市の間に位置し，この地域において最も古く1804年(文化元年)に建立された国泰寺の存在が知られている．国泰寺は厚岸湾東岸に位置し，同寺に伝来する「日鑑記」や木簡には，1843年(天保十四年)におきた十勝沖地震津波(Mt 8.2)についての記述がある．しかし，この地域にはそれ以前の地震津波に関する史実は存在しない．今回，この国泰寺跡(現国泰寺眼前)からほぼ南東方向へのびる低地に沿って調査測線を設定し，3カ所において津波痕跡調査を実施した．

研究の手順

まず，史跡国泰寺跡において重機によるトレンチ掘削を実施し，深さ約2 mの壁面から珪藻遺骸分析や軟X線用の分析試料を採取した．即ち，プラスチックケースをトレンチ基底から表層まで連続して壁面にさしこみ，不攪乱かつ定方位の状態で見取った．また，直径2.2 cm, 7 ccのポリカーボネートキューブも同様に連続してトレンチ壁面に差し込み，堆積物物性値測定用の試料とした．また，調査測線上の沢奥では検土杖による調査を実施した．得られた堆積物は，ほぼ全層を通じて泥炭から構成され，層厚数cm～数10cmの砂質シルト～細粒砂層も9層夾在されている．また，層厚数 cm火山灰層が5層狭在されている．これらの火山灰については，波長分散型EPMAを用いて火山ガラスの主成分化学組成を調べた．さらに既存の火山ガラス分析データと比較検討し，その給源と降灰年代を推定した．一方，珪藻遺骸分析は，厚さ5 mm毎に連続で取り出した試料からスライドを作成し，鏡下において同定を行った．その際，1試料あたりのカウント数は350個を目標とした．

各種分析の結果

火山灰分析の結果、本調査地域には、Ta-a, Ko-c2, Ta-b (1667年), B-Tm, Ta-c2 (2500年前) が分布することが明らかとなった。今回得られた泥炭層は、過去約3500年間にわたって沿岸湿原で形成されたと推定できる。珪藻遺骸分析の結果、(1)ほぼ全ての泥炭試料において *Pinnularia viridis*, *Navicula elginensis* などに代表される淡水生種および *Hantzschia amphioxys*, *Pinnularia borealis* などの陸生種が卓越しているが、砂層からは *Palaria sulcata*, *Cocconeis scutellum*, *Nitzschia granulata* などに代表される海生種の珪藻遺骸が特徴的に産出すること、および、(2)砂層中の珪藻遺骸数は、泥炭層中の珪藻遺骸数と比べ個体数が著しく低いこと、の2点が明確となった。よってこれらの砂層は、過去に海水と共に海側からもたらされ、短時間で堆積した海成イベント堆積物であると結論づけられる。

今回の研究成果の意義

これらの分析結果をふまえ、前述した火山灰層序を用いて霧多布地域の津波イベント層序と対比を試みたところ、これら史跡国泰寺跡で発見された海成イベント堆積物は Ts2~Ts10の各津波イベントに対比されることが分かった。したがって、厚岸地域でも、根室・釧路地域と同様に、過去3500年間に9回の巨大津波の襲来を被った可能性が高いと判断される。